佳作

それだけで

東京都 お茶の水女子大学附属中学校一年　梨原 希珠

新型コロナウイルスが最も流行っていた時期に、海外の日本人学校に通っていた私は、ロックダウンを経験した。家の外に出るのは禁止。令和の時代に、政府から配給が届いた。一学期の間は学校に行くことができず、オンライン授業が続いた。画面越しに伝わるクラスメイトたちのうんざりした気持ち。知らない言語で呼び出されては防護服姿の人に検査され、チクチク痛む鼻を押さえながらタブレットの前に駆け戻り、板書に追いつこうと必死にシャーペンを動かした。

こんな暮らしはもう嫌だ。早く終わってほしい…そんなことを願っていたのも、最初のうちだけだった。いつからか私はもうその生活に何も思わなくなっていた。毎日、特に笑うことも怒ることもなく、ただ平然と過ごした。感覚が麻痺していた気がする。

九月からは学校に行けるよ。両親は、日々をぼんやりと過ごす私をそう励ましたが、やはり私は何も思わなかった。実感がわかず、わくわくもどきどきもしなかった。期待をしてはいけないような気がしたし、期待の仕方も忘れてしまっていた。

しかし、その日は―九月一日はやってきた。私はわけもわからないまま早起きし、パンをかじり、歯を磨き、服を着替え、三ヶ月分のよそよそしさをまとったランドセルを背負った。

バスに乗り、学校に着いてバスを降り、校舎に入り、階段を上った。入ったこともなかった自分のクラスの教室に歩み寄り、開いたドアから中をのぞく。そこでは―クラスメイトたちが、お喋りをしていた。ただ、それだけのことなのに―その瞬間に、私は感動していた。心臓が跳ね上がったわけでも、大声をあげたくなったわけでも、涙が溢れ出してきたわけでもないけれど、それはこれまでで一番感動した瞬間だった。

タブレットの中に住んでいた顔たちが、カクカクしていた動きが、ミュートされていた笑い声が、接続が悪くて途切れ途切れだった言葉が、リアルに一斉に私を包み込む。あまりの情報量に脳が混乱したのか、表情も心拍数も変わってはくれなかった。

「あっ」と、去年からの友達が声をあげた。画面越しでずっとずれていた視線がかち合う。彼の名前や性格や、共に過ごした思い出が、脳裏を駆け抜けていった。

「梨原だ！」

オンライン授業で、遠慮がちに「さん」をつけて呼ばれるばかりだった私の名前を、明るく大きな声が呼び捨てにする。

「お前の席ここだよ！」

そう。この情報に溢れる教室に、私の席が、居場所があるのだ。今日からまた、私はここに通うのだ。一瞬のうちに、真顔のままで、私は思い出した。学校を。教室を。友達を。人間を。私を。

ワンテンポ遅れて、「うん！」と私は笑う。

あの時の、コンマ一秒の感動を、真顔でかみしめた情動を、そしてしばらくしてから全身を震わせた幸福を、私は生涯忘れない。